（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　　梅　谷　博　之

本論文は、モンゴル語においてヴォイスにかかわる２種類の動詞接尾辞（動詞の使役形を派生するとされる接尾辞 -UUL、および、動詞の受身形を派生するとされる接尾辞 -GD）について、この２つの接尾辞により派生される動詞（UUL 動詞と GD 動詞）を含む文を形式上の特徴に従っていくつかのタイプに分類したのち、それぞれのタイプの文が表し得る意味の範囲を、著者自身が約 10 年間にわたり計５名のモンゴル語母語話者に直接インタビューして得たデータに基づき、詳細に記述した労作である。

第１章では、本論文で前提とされる UUL 動詞文と GD 動詞文の構文が整理され提示される。これに続いて、第２章では主に UUL 動詞文がどのような項を含むかにより意味とその特徴が記述される。対格名詞句を含む UUL 動詞文は生産性が低く「起因者（使役者）が行為者の意思に反して行為を実現させる状況」を表すこと、与位格名詞句を含む UUL 動詞文は「起因者が行為者に行為の実現に直結する環境を与える状況」を表すこと、造格（具格）名詞句を含む UUL 動詞文は「行為者が起因者からの働きかけに応じるかたちで行為を実現する状況」を表すことが示される。第３章では GD 動詞文が扱われる。同じ項を含む能動文が想定できるか否か、どのような動詞が -GD による派生形を持たないかについて検討がなされる。第４章では、-UUL と -GD が両方現れる場合と重複する場合が扱われる。

本論文の中心的テーマである UUL 動詞文が「受身」の意味を帯びる条件については、第２章で、与位格名詞句を含む文では「主語名詞句が身体的または心理的影響を受ける状況」があること、造格名詞句を含む文では動詞が「世話」や「指導」を表す場合であることが主張される。また、与位格名詞句や造格名詞句とともに対格名詞句を含む文は、多くの場合「受身」を表さないが、対格名詞句が主語名詞句の指示対象の身体部位あるいは主語名詞句の指示対象に関係する対象である場合は「受身」を表すことがあることを主張する。

本論文の分量は決して多くないが、提示される例文は厳選されており、該当すると思われる例はほぼ調べ尽くされている。構成も明快であり、極めて充実した内容を持つ。信頼性の高い研究と言える。本論文により、使役と受身が同一の構文で表されることがあるというモンゴル語の興味深い現象がそのヴォイス体系の中で正確に特徴づけられた結果、今後ヴォイスに関する通言語的研究に大きく寄与することが期待される。

本論文の課題としては、関係節や副詞節など非定形の動詞が現れる場合の考察が十分でないこと、母語話者間のバリエーションを分析に活かすことができていないこと、従来の使役と受身という枠組みを超えるような一般化に至っていないこと等が指摘できる。しかし、いずれも非常に困難な問題であり、かつ、本論文の到達点から新たに見えてきた課題も含んでいる。従って、本論文の価値を減じるものではないことは言うまでもない。

以上の理由により、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものとの結論に達した。